

## 若き新島の祈り

竹中正夫

(大学神学部教授)

新島襄は祈りの人であった。それは、整った儀式的な祈りではなく内的な血涙のこもった祈りであった。それは恵れた時代の感謝であるよりも、逆境の中に捧げられた悲願であり、決意の表明であった。

函館をたつて、ボストンに着くまでの一年一ヶ月余の船旅は、苦難の道であり忍従の旅であった。ボストンに着けばなんとかなると思っていたが、いざボストンに到着すると、リンカーン大統領の暗殺のしらせをきき南北戦争後の社会的不安が伝えられた。物価は高くなり生活は苦しく、波止場であった人は面倒をみてくれる人などありやしない。「もう一度海に戻るのだな」といつておどかした。

かくまでと かねて覚悟はせしなれど  
かくかくかくと かくとは思はじ  
とうたつた。そのとき、彼はボストンに出で最初の買物をした。それは『ロビンソンクルーソー漂流記』であった。彼は、孤島に漂流したクルーソーが、波打際で祈ったことにならつて祈っている。

一九一五(大正四)年、組合教会の機関誌『基督教世界』(第一六七一号)は「新島先生の求道歌」と題してそのときの祈りを記している。それは、もともと米国の雑誌『ゴングリゲーションナリスト』に出していたものである。

神よ!

もしあなたが眼をおもちでしたら  
わたしをみつめて下さい。

もし、あなたが耳をおもちでしたら  
わたしの叫びに耳を傾けて下さい  
わたしは心をこめて

聖書をよみ ひらかれた人間として  
生きることを願います

新島襄

一〇年にわたる海外の生活の中で彼は孤独を味わい、健康を害ね、また経済的な辛酸を嘗めた。そんな中で、彼を内側から支えたものは、日々に聖書を読むということと祈ることであった。肉体的にも彼は、決して強い人ではなかった。精神的には、彼はやさしい、ひかえ目の人であり、決して豪毅の人ではなかった。そうした中で、彼が強くあつて患難を乗り越えることが出来たのは、聖書と祈りであつたといつても過言ではあるまい。今日、セラムのピーボディ博物館には、新島の在米中の数少ない遺品として、「日々爾之十字架を取可し」というルカによる福音書のことばを記した直筆が残されている。これは、まさに在米中の彼の座右の銘であつたと思われる。

